縹十五句

松岡隆子選

ありなしの色の盛りを山桜　佐藤郭子

苗札の最後の文字が土の中　唐木和世

屈託の膝折り雛菊を愛づる　髙橋愛子

墨堤の残花にかなふとの曇　松原ふみ子

人待てば夕照りながき飛花落花　小山陽子

水溜りひとつとびして虚子忌なり　川上昌子

日おもてへ椅子の数足す花見茶屋　平沢千恵子

雨の降るひと日も佳けれ花も過ぎ　渡辺あつ子

春深き花瓶の闇に水を足す　臼井清春

一本の桜往き見て帰り見て　中島紀子

携へしものに傾く流し雛　小村絹代

初蝶を見し日は遠き海思ふ　菊池一枝

鵜の池の水揺れどほし蓮の芽　梶浦道成

春昼の九官鳥が何か言ふ　椎名佐和子

残桜の音なく散れる水明り　田坂孝志